



## 血管撮影装置が更新されました！

小山俊一（脳神経外科医師）



血管撮影法(angiography)とは、足の付け根や肘、手首の動脈からカテーテルという細い管を挿入し、血管の走行や血流状態を検査する方法です。この手法を用

いて脳動脈瘤に対するコイル塞栓術、頸動脈狭窄に対する頸動脈ステント留置術(CAS)、肝癌に対する肝動脈化学塞栓療法(TACE)や心筋梗塞に対する経皮的冠動脈形成術(PCI)等の治療が行われます。

当院では2015年10月(主に放射線科、脳神経外科使用)と12月(主に循環器内科使用)にPHILIPS社製の最新の血管撮影装置へと機器の更新を行いました。

特に直径数ミリの脳動脈瘤に対するコイル塞栓術等機器の性能に依ることが多い脳血管内治療の専門医として、新機種の紹介をさせていただきます。

### <新機種の主な特徴>

#### 1. 被ばく線量の大幅な低減

X線検出感度の高い平面型検出器(FPD:フラットパネルディテクタ)の搭載により旧機種に比べ大幅な被ばく低減を実現。

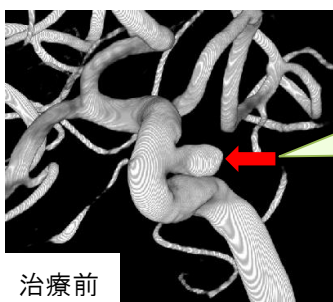
#### 2. 精度の高い検査・治療

最先端の画像収集・デジタル画像処理・画像表示技術により、高画質の画像が撮影でき、精度の高い検査・治療が実現。

#### 3. 3D-RA、XperCT(CTライクイメージング)

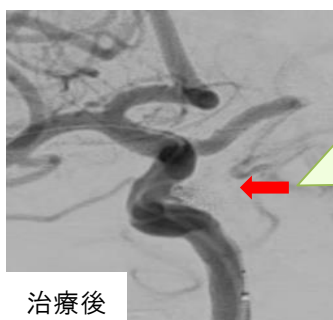
3D-RAにより血管の3Dアンギオグラフィ(脳血管を立体的に描出)が得られ、XperCTでは血管撮影室にしながらCT検査のような3D画像が得られます。この機能を用い、複雑な血管走行などを3D画像をもとに手技を進めることができ、検査時間の短縮(被ばくの低減)と精度の高い検査・治療につながります。

私が当院へ赴任して2年半が経ちますが、新機種の導入を患者さん共々心待ちにしておりました。旧機種では治療が困難であった脳動脈瘤の治療も開始。今後とも安全第一で患者さまに優しい治療を心がけ診療に当たりたいと考えております。



治療前

新機種で撮影した未破裂脳動脈瘤



治療後

同動脈瘤に対しコイル塞栓術を施行後(塞栓後造影剤にて造影されなくなった。内部が血栓化し破裂予防となる)



新しい血管撮影装置と新装された血管撮影室